特別展感想文についてのコメント

宮澤・レーン事件を考える会事務局

感想文用紙がテーブルに置かれた12月15日から展示終了の1月末日までに計55篇の感想文が寄せられた。事前の新聞報道やポスター等を見て訪れた者が少なくない。北大に来てたまたま立ち寄ったものもいる。学生の感想文も見られる。私たちの集会等に参加していたと思われる人の感想文もある。来場者に比して寄せられた感想文が多いか少ないかはわからないが、そのいずれもがきわめて重要な中身をもっている。

以下、感想文に見られる特徴点を整理してみる。

第１点は、この特別展が来場者に与えたインパクトの大きさを感じさせる。それはとり

もなおさず特別展の開催が大きな成功を収めたということだろう。期間中の博物館来場者は1万人を超えたという。その何割が特別展に足を運んだかはわからないが、寄せられた感想は、月並みな内容ではない。「今後このようなことが二度と起こらないように私たちに大切なことを教えて下さっている。」「「来て良かった！」「……見ていて涙が出てきました。」「心のこもった展示だということがとても伝わりました。」「特別展を観て涙が出ました。」「大事な意義ある企画展だと感銘を受けました」等々。

これほど心ゆさぶられる展示であったと記す例はそう多くはないのではないか。それは多分に宮澤弘幸の生き方への共感とその運命への同情によるものであろう。今回の展示のねらいはレーン夫妻や宮澤弘幸の人物像に焦点を当てることだったが、それが見事に成功したと言っていいであろう。

第２点は、主催者である北大(博物館・文書館)と「考える会」への賛辞とでもいうべき感想である。「北大がこうして企画展を開いてその事実をありのままに発信しようとしていることは素晴らしいことであった。」「このような痛ましい事件が健全な一学生の人生を奪ってしまった記録を残して見せて下さった大学の姿勢に感謝します。」「北大がこうして企画展を開いてその事実をありのままに発信しようとしていることは素晴らしいことであった。」等々。そして「長年に渡る関係者各位の気の遠くなるような困難な道のり、活動の継続に敬意を表します。」「ようやく北大内で実現した展覧会！もっと早くにし、秋間さんに見ていただくべきでした」等々。この点も、史実に沿って展示するという北大の姿勢が受け止められたものと思われる。

第３点は、宮澤弘幸への思い入れの強さがみられることである。「戦争に翻弄され犠牲になったことに心痛む思いです。」「宮澤さんの衝撃、驚き、辛さ、悲しさを、きちんと理解したくて今日参りました」「(子どもを連れてきたのは)同じ年の頃の宮澤さんの無念を知っておいてほしかったのです。本当にひどいです。二度とあってはならないことです。」「宮澤弘幸さんと妹の秋間さん、ご両親の胸中を思うと胸が押しつぶされそうです」等々、中にはハロルド・レーンと比べて宮澤の場合は……、というものもある。

この点にかかわって、以下のように今後の課題が述べられる。「宮澤氏の冤罪は晴らされたのでしょうか？……戦前の判決を覆し、賠償請求はできないものですか？」「大学側も宮澤さんを守れなかった責任を認め、宮澤さんの名誉回復運動を積極的に行うべきです。……卒業証書を贈ってもよいのではないでしょうか」。これらのことについてはしっかり受け止めて考えていくべきであろう。

第4点は、大学と権力の関係についての指摘である。今日学問(研究)の自由をめぐっては様々な権力側の介入と締め付けがある。「北大側の動きや意向に関する情報が少なく、そういったことについてももっと知りたいと思いました。……創立当初の学風を思えば、実情を明らかにして下さることを期待せずにはおれません。」「戦争当時の治安維持法、大学の自治への国家介入を、今どのように教訓とすべきか？」「戦争に関して大学がどうかかわったのかを明らかにしつつ、その反省に立って平和を作り出すために、北大にも奮闘してほしいと思います」等々の意見には、そうした現状に対する危機感が反映されているのではないだろうか。

そして第5点、このような事件を再び引き起こさないために、記憶することの必要性が指摘されていることである。ある来場者は「宮澤さんの優秀さを知ってびっくりしました。殺されたのがもったいない。多くの人が、今後も開催を、常設の展示をと希望している」。また、「せっかくの展示ですので、その一部でも恒久的にアクセスできるように保存するとともに、学内に関連した施設などの案内板を設置することで、より多くの人々が宮澤・レーン事件に触れ、考えるきっかけになることと思います」との提言がある。そして「大学は生命を育てるところです。命が殺されることが再びおこらないように、毎年戦争の怖さを学ぶ時をつくってほしい。人の目につくものがあるほうがいいのかもしれない。」「外国人教員と学生たちの交流を知らせるモニュメントを！未来への道しるべとなります！」。

ここに来場者の希望が集約されているように思われる。私たちも未来への道しるべとして、案内板とモニュメントを設置することを考えていきたい。

※この文章は今年4月6日に特別展の意義と課題について「考える会」として整理したものを基にしています。